

「光るキノコ」といえば、一番最初に思い浮かべるのは「ツキヨタケ（月夜茸）」でしょう。ブナの枯れ木に重なるように発生します。奥多摩の登山道などでよく見かけるキノコです。「茎」は短く、形状は「ヒラタケ（平茸）」に似ています。「光る」といっても、その光は非常に弱く、闇夜で見ても肉眼ではほぼ光っていることはわかりません。長時間露光の写真に撮って、やっとおぼろげに写る程度の明るさです。月夜の晩には光っていることは全くわからないでしょう。厄介なのはツキヨタケが毒キノコだということです。色はシイタケに似ているのでよく誤食されますが、幸い猛毒菌ではありません。

もっと強い光を発するのは「ヤコウタケ（夜光茸）」や「シイノトモシビタケ（椎之灯茸）」です。これらは野外の森で光っていれば確実に視認できます。しかし光っている理由は不明です。ホタルのようにキノコ同士で呼び合うわけはありません。「光で虫を呼んで孢子を運んでもらう」というのはもっともらしい説です。しかし、光らないキノコでも夜は虫だらけで、有意な差はありません。要は毒キノコや光るキノコは「キノコ（子実体）」が生産した物質がたまたまヒトにとって毒だった、光る物質だった」という説を、私は支持しています。

強く光るキノコはなかなか手に入らないので、3Dプリンターで作ってみました。3Dプリンターの素材（造形材料）は、針金状に巻いた「フィラメント」と呼ばれるプラスチックの一種です。その中に「蓄光性フィラメント」という素材があるのです。それで造形すると、どんな形状のモデルも発光するようになります。写真はそのオブジェが発する光だけで撮影しています。一度強い光を当てると、20分ぐらい光り続けていました。

